

11月26日

Copyright: Takumin

革命の前夜、王が全国参議会の招集を宣言する。だが、誰も当時の形式を覚えていない。どのように投票するのか、だれが発言権を持つか、そもそもどこに集まるか。そこで第三身分の人たちは議会から締め出されたが、テニスコートに集まりあることを宣言した。彼らはこの議会の全構成員は王国の憲法が制定され、確固たるものになるまで解散しないといった。ここからフランスの国民が始まることになる。第三身分が国民に変身した。これがテロに至ることになる。即ち恐怖政治がとられるようになる。なぜこんなことになったのかを今日は説明していく。まず、ホブズの主権理論が重要となる。国家は権力装置であるが多くの人間から成り立つ。彼は権力の淵源は諸個人に求められると説明している。では人民とは何か？実態として客観的に存在するのか？しない。ではいつどのように生じるのか？人民とは主権が成立した後に主権者に作られると彼は主張する。諸個人が主権者を作り、彼らは全自然権を主権者に譲渡することになる。不可逆的な譲渡でいったん渡せば戻ってこないという契約。個々人の権利を譲渡された主体としての主権者は今度は当然ながら彼らを支配する権利が生じる。一方に従う義務、他方に支配する権利が生まれ、その後で主権者が国民を代表するに至る。主権者は国民に対して命令するが、国民は自分の意志として受け止めなければならない。自分の意志に反することを命令されても従わねばならない。それが自分の意志とされるからである。ルソーのモデルでは人民が常に主権者なので代表者が否定されることになる。ルソーの考えでは個々人の意思は他者によって代表されえない。そうすると代表という観念が正当性を獲得することは不可能になる。そして彼は代表性を否定する。彼は直接民主制のモデルを唱えた。彼はこれをリパブリック(共和制と呼んだ)。ルソーのモデルに従うと国民全員が政治に参加せねばならなくなる。自分たちで代議士になり、法を作らねばならない。そうするとこれを実行することは不可能であることが分かってくる。ルソーは大国ではこのシステムは実現不可能であるから小さな国でやることを主張した。ルソーは市民は有徳でなければならないとし、共同体の運命を有徳な市民で決していかなければならないと考えた。これを近代国家に適用できない。ではどうするか。フランスでリパブリックを実現するためにはどうすべきか。ホブズの代表理論とルソーの人民理論を足した。どういうものかという議会中心主義が帰結する。議会が法を作る。今では当たり前だが、この理論は重要である。どのようにこのシステムが正当化されるか。ルソーは代表性を認めないのにどうして両者を足せるのか？シーエースは新たな代表という概念を創出した。代表者をまず市民が選ぶ。中世の代表性の理論では、代表者は背居民の意思を代弁する存在というもので、命令的委任という。代議士は選挙民の意思に拘束され、それ以上のことを主張してはならない。そうすると、議会には個別的利益が集まり、多数は意見が勝利するというシステムであった。それでは国民の意思は反映されない。では国民の意志、一般意思をどう考えるのか。シーエースは次のように考えた。選挙民は代表者を選出し、彼が代表するのは選挙民ではなく、国民全体。いったん選ばれるとその人は全国の代表になる。そうでないと一般意思は代表されないというのがシーエースの考えで、現在まで通じている考え方。代表者が選出されると、今度は代表者が一般意思を作り出す。代表者が全体の意思を体現することになる。何か代表者が命令したときに国民という概念が生じる。ルソーとの違いは、彼は全員が参加せねば一般意思

は出てこないと主張したが、シーエースは一般意思を形成するためには代表者が法律を作らねばならない、つまりマイノリティーが全体の意思を作り出すし、マイノリティーしか政治に参加しないということを主張した。シーエースは自らの主張を労働分業という概念に依拠しながら正当化しようとした。これはスミスも同様である。スミスは社会の多様なアクターは自分たちが最も得意なことをやればいいと言った。無理にパン屋さんが政治に参加しなくてもいいし、別の職業を求めなくてもいいということになる。自分の職業で私的利益を追求すればいい。スミスは全ての人が私的利益を追求する結果、全体の利益、共通善が形成されることを彼は論理的に説明しようとした。シーエースはこれを政治の領域に応用する。一般市民とは教育がない。政治について志向する力を持っていない。法律を作る能力を持っていないし、知識がない。彼らが政治に参加すると衆愚政治に陥ると彼は主張した。やはり知識や教養のある人間が政治を行うべきで、彼らが政治を行うことによって結果的に全体利益になるのだという結論に至る。エリートたちが人民の名において、人民のために支配するという発想。それがシーエースの人民主権論であって、これが革命の原因となる。ルソー派、シーエース派、王の三つの派閥。シーエースは人権を重要視した。その10年後に恐怖政治がひかれることになるが、彼は人権と人民主権を両方大切であるとした。ルソー主義者たちは人権は悪くはないがそれより重要なのは一般意思であると考えた。どのような相違の帰結があるかというと、ルソーの考えでは主権は制限されない。人権を主張するということは主権を制限することを意味する。なぜなら一般意思によって侵害してはならない権利が主権であるためである。このシステムを導入すると様々な問題が生じてくる。それが恐怖政治である。どうしてそうなるのかというと、シーエースの理論では一握りの人間が全体を国民の名において支配する。しはし、支配者が刻印の名においてひどいことをしたらどうなるか、それが極端な方向に行くと恐怖政治になる。先ほど人権は不可侵であることは合理的に説明できないとしたが、神が授けたものであると解釈されていた。だから人権は何者によっても侵すことができないということになる。ところが18世紀になると神が信用されなくなり、根拠はなくなる。恐怖政治を行ったリーダーは非常に有徳な人間で自分の私的利益を一切考えなかった。その彼が徳の名において恐怖政治を行った。有徳な人間が有徳な共和国を作らねばならないから、腐敗分子は切り捨てなければならないというロジックになっていく。少数であっても有徳な人間であれば、その人たちの意思は社会全体の意思であると話を発展させ、この少数の有徳な政治家が有徳な人民を上から作り出す、あるいは腐敗した人間を作り替えるというロジックが出てきた。人々の内面までコントロールしようとする考え。これが全体主義の起源。新しい共和政が成立したが安定しなかった。革命が終わらなかった。次にどうなるかというと1799年にクーデターがあり、ナポレオンがリーダーになった。さらに人民主権の名において革命を起こし、帝政が成立する。ナポレオン王帝。彼はどのようにして自らの支配権を正当化したのか。彼はコロシカ出身の貴族にすぎなかった。彼は国民投票によって支配者に選ばれた。彼が軍のリーダーになりクーデターを起こし、国民から支持されることによって権力を得ることになった。その際に彼がどのようなシンボルを扱ったのか。ロジックとしては彼は人民主権を援用し、一般民衆が理解できるようにシンボル化した。アルコレ橋のバナパルト(んナポレオン)という絵で彼はフランス革命を体現したように書かれた。また、ほかの絵では英雄として描かれた。ここ

までイメージを遣うようになったのはフランス革命後。なぜなら人民主権になって、彼らの心を動かさねばならなくなったからである。ヤッファのペスト患者を見舞うボナパルトという絵にはペストの患者に触れているところが描かれ、これを見た民衆は神のように優しい方だと思った。ある歴史家によると彼がペスト患者だと知らずに触ったといわれている。ナポレオンは法にのっとり政治を行うといったが、自分が法だと考えた。人民の名においてナポレオンが法を作るからである。